首里城正殿大龍柱問題

永津　禎三

Ⅰ．沖縄の学術はここまで歪められた

■学府の失墜

沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館企画展「琉球の芸術・文化に魅せられて－鎌倉芳太郎と首里城－」（2020年10月23日～11月3日）で、「寸法記」についての説明文が展示最終日に突然差し替えられてしまい、それまで掲示されていた説明文の内容が隠された。

これは、首里城復元に向けた技術検討委員会高良倉吉委員長の見解と不一致なことを一旦公表してしまい、この事実を隠蔽しようとした「忖度」であり、真理の探究を目指すべき「学問の自由」を自ら閉ざしてしまう、まさに「学問の自死」ではないかと、私は、学府の責任者である波多野学長及び森附属資料館長に、大学としての回答を求め続けている。

本誌『N27』の前号（9号）に、このことも述べた〈「琉球史ムラ」が首里城を穢している〉を掲載していただいた。これが2021年12月25日に発行されたので、2022年1月27日に沖縄県立芸術大学の15名の教員に郵送した。

学長と資料館長に何度回答を要求しても返答が無いままであったので、教員にこのような問題が起きていることを知っていただき、大学としての自浄能力を発揮してほしいと期待したからである。

沖縄県立芸術大学の教員には、あいちトリエンナーレ2019の問題に積極的に発言していた教員もいるので、このような「学問の自死」と言える危機的な問題に対して、当然、議論が巻き起こるものと思っていた。しかし、2名から「推移を注視したい」との返事があったのみで、これが大学としての議論になることはなかった。

これでは埒が明かないと、4月に入って事務局に、附属図書・芸術資料館が全く対応しないことを伝え、事務局がその対応を行うべきであると要求した。

はじめ事務局はこの問題を把握していなかったのか、これまでの経緯について説明を求めたので、私は過去の経緯の資料をメール添付で送り、回答を待った。

1週間しても連絡がなかったので、こちらから再度連絡すると、次のようなメールが返って来た。

「先日ご依頼の件については、事務局ではなく、附属図書・芸術資料館において対応させていただきます。お送りいただいたメール等は、附属図書・芸術資料館にも共有し、お電話での内容についても説明しておりますので、本件につきましては、直接、附属図書・芸術資料館にお問い合わせいただければと存じます。」

沖縄県立芸術大学は、学長も資料館長も事務局長もそして教員までもがこの問題に「だんまり」を決め込んだようである。この大学は「学府」であることを放棄した。

当事者の麻生准教授は『N27』9号の記事をどう考えていらっしゃるのか、直接連絡をとってみるべきなのかと沖縄県立芸大のホームページを見たら教員名簿から消えていた。驚くべきことに、琉球大学教授に栄転されていたのである。まさに「琉球史ムラ」人事である。

■論理破綻の〈暫定的な結論〉

2021年12月1日に首里城復元に向けた技術検討委員会は記者会見を行い、次のように「暫定的な結論」を発表した。

暫定的な結論（案）
・上記の検討結果をふまえた上で、令和復元においても、大龍柱の向きは平成復元を踏襲する。
(1) フランス海軍古写真と「寸法記」、「百浦添御普請絵図帳」はほぼ一致しているが、正殿の内部や外部の復元の根拠としたのは後者の情報であり、大龍柱の向きについてもその情報に依拠することとした。
(2) ただし、「御普請絵図帳」（1846年）からフランス海軍古写真（1877年）までの約30年間において、大龍柱の向き等に変更があったことは明らかなので、その間の経緯を示す明快な資料や認識が提示されるならば、当然のことながら、ここで述べた結論は再検討されることになる。その意味で、あえて強調するならば、令和復元における大龍柱の向きの決定は、暫定的な結論であることを確認したい。

記者会見では、この（案）で、「大龍柱の向き等に変更があったことは明らか」とは言えないと委員会で指摘があり、「大龍柱の向き等に変更があったと考えられる」に変更すると口頭説明があった。

古文献記録では大龍柱の向きに変更を加えたことを示す記述は見つからなかった。当然「明らか」と言えるはずもなく、「考えられる」とするにも「絵図が正しい」ことを根拠とするしかないが、「絵図だけでは向きは特定できない」ことは私が〈多賀参詣曼荼羅〉で例証している。「絵図の読み」を技術検討委員会は誤っていると指摘されながらこれを無視して、強引に「絵図が正しい」と根拠にならない、意味もない事例ばかりを挙げている。

したがって、この「暫定的な結論」が論理破綻であるのは明らかである。「大龍柱の向き等に変更があった経緯を示す明快な資料や認識が提示され」なければ、フランス海軍古写真（1877年）（＝ルヴェルトガ撮影首里城正殿写真）という唯一の歴史的事実は変更できない。現時点では、「暫定的な結論」はルヴェルトガ写真の姿にしておくというのが実に当たり前の学術的結論の筈なのである。

高良倉吉委員長は、「とにかく2022年1月30日首里城復元に向けた技術検討委員会報告会で説明する」として記者会見を打ち切った。その後公表された報告会の実施方法で、一方的な技術検討委員会の報告で済ませるつもりであることが判明した。

■茶番だった報告会

すぐに沖縄総合事務局に対して、一方的な報告でなく、相互に意見を交わすことができる討論会やシンポジウムとするよう要求したが全く無視された。そのため、「首里城正殿大龍柱を考える会」、「首里城再興研究会」、そして「絵図から考える首里城の会」の三団体は1月7日付で公開質問状※を提出し1月20日までに回答するよう依頼した。

ところが、沖縄総合事務局は非常識にも電話一本で文書回答はできないと伝えてきた。理由を質すと、「報告会での報告に質問状にあるいくつかの内容が含まれている」と理由にならない返答。本来は文書回答し報告会でその内容を補うのが当然である。国の機関の仕事としてあり得ない。

報告会当日の私の質問事項や、そこで配布された報告資料についての問題点は、〈首里城大龍柱 技術検討委への指摘 上〉琉球新報（2022年3月15日）として掲載されたのでお読みいただきたい。

ここでは、報告会当日、私の4つの質問から唯一読み上げられた次の質問について述べておこう。

④高良倉吉資料「総括的な視点から」I（2）に、〈「寸法記」は写しではなく、原本である。〉とあるが、その根拠は何か？

私の中では優先順位は一番下であったが、読み上げられた④の質問は、当日配布された高良氏の資料に記載されていた内容への質問である。これへの高良氏の回答には耳を疑った。

「正確には紙料の年代測定が必要だろう。王府は文書が傷むと書き直していたので、それではないかと思う。鎌倉芳太郎が写したとは考えられない、筆跡が異なるからだ。」要約すれば以上が回答である。

つまり、回答は全て推測で、はっきりしているのは〈「寸法記」は原本でない〉ことだ。質問されて「それは嘘でした」と答え、再質問はさせない。そんなとんでもない茶番の報告会だったのである。

さて、公開質問状のことに戻ろう。公開質問状は三団体から出していたので、報告会でこれについての質問は当然私も提出し、複数の者からあったはずだが、全て無視され一つも読み上げられなかった。

さらに恐ろしいことが起こっていた。首里城正殿大龍柱を考える会が、この公開質問状を会場で配布しようとしたら阻止された。沖縄総合事務局は、会場にとどまらず館内での配布までをも行わないように告げた。本来なら、公開質問状を受け取った沖縄総合事務局が率先して聴衆に配布すべきものである。それを、質問者側がわざわざ準備して来たものまで配布阻止するとは何事だろうか。国の感覚はここまで麻痺してしまっている。

※公開質問状　https：//drive.google.com/file/d/19DlKTJ2-yt3oS6CmcJOkw_debi-N32eO/view

■問題館長が続投

2021年12月20日付沖縄タイムス紙の「大龍柱の向き 謎のまま」の記事における、田名真之氏のコメントには更に唖然とさせられた。田名氏は沖縄県立博物館・美術館館長であり、技術検討委員会の副委員長を務めている。

沖縄総合事務局担当者のコメント〈あくまで「学術的な検討」だとして、専門家が判断すると強調。〉に続き、田名氏は次のように発言した〈政治的問題ではなく、学問研究の問題。広く討論して決めるものではない〉。この発言は、沖縄県立博物館・美術館館長として全く不適格な発言である。

根拠なく唯一の史実であるルヴェルトガ写真を無視するのは、歴史の改竄である。これはまさに「学問研究」の大問題であって、この不可解な行動こそ「政治的問題」ではないかと逆に問われるものだ。

このような、論理のすり替えも大いに問題であるが、沖縄県立博物館・美術館館長として不適格なのは、「政治的問題であっても学問研究の問題であっても、広く討論すべきものである」という当然至極な認識を否定していることである。

「美術」が単なる「趣味趣向の美しく珍しいもの」ではないことは現代の常識である。「美術」は当然のことながら、「政治的問題」にも関わるものであり、広く社会の議論を喚起するものである。

田名氏の発言は、この健全な美術のあり方を全否定するものであり、沖縄県立博物館・美術館館長の職に留まっていれば、当然その価値観は展示や企画にも反映され、沖縄の文化を歪めてしまうものである。私は本人宛に、即刻の館長辞任を書面で勧告したが、なんと、新年度を迎えても田名氏はこの職に留まったままである。

■三猿ムラ学会

この記事の中での安里進氏の発言も大いに問題である。

〈今後、寸法記の絵図は間違いだとする説得力ある論証が出てくれば、学術論文で議論し、工事段階であっても案を見直す必要があると指摘する。「検討委の案が絶対正しいとは思わない。首里城は謎だらけ。学会などで議論し、社会全体で検討を続けてほしい」〉

何度言っても、この人たちは聞かないのかもしれないが、「絵図が間違い」とは言っていない。「技術検討委員会は絵図の読みを間違っている」と指摘し続けているのだ。

「学術論文で」「学会で」とさも正当そうに発言しているが、その学会に安里氏は自らの説「大龍柱は向き合いのまま王国は滅亡した」を訂正し

たのだろうか。研究者であれば、自説の間違いを謙虚に訂正し、どこでこの間違った結論になってしまったのかを検証するのが当然であるが、今回の「暫定的な結論」をみる限りそのような反省は全くみられない。

このような「琉球史ムラ」というべき学会を、まともな研究者は相手にしないし、万が一投稿したとしても、自説に不利な論文・論考をこの「琉球史ムラ」学会が受理するとは到底思えない。

技術検討委員会メンバーの行いは、平成復元の時から間違いだらけである。後田多敦神奈川大学教授が〈大龍柱向きの根拠－首里城復元を考える〉琉球新報（2021年10月19日、20日）で的確に指摘されているように、『青い目が見た「大琉球」』の木版画図版を無視し、「伊藤家正殿写真」を検討しなかった。

〈相対説をとる研究者らが「史料批判」などの重要さを知らないことはあり得ないので、自説と矛盾する資料を黙殺していたといわれても仕方がないだろう〉（後田多）

残念なことだが、「黙殺」どころではない。自説に都合の悪いことは、「琉球史ムラ」の外から指摘されても、「見ない」「聞かない」。そして、「琉球史ムラ」の中からは、自説に都合の悪いことは「言わせない」。恐るべき「三猿ムラ」なのである。

Ⅱ．研究者としての矜持を

不自然な論証

〈首里城大龍柱 技術検討委への指摘 下〉琉球新報（2022年3月16日）において、私は、首里城復元に向けた技術検討委員会報告会で配布された安里進『平成復元の検証－報告資料』の中の「戦前大龍柱は欄干に連結していたのか－西村説の検証」について見解を述べた。

「戦前大龍柱にホゾ穴は存在しないという事実」の論考手順や方法が通常では考えられないものであり、データの改竄、捏造報告に当たるのではないかと指摘した。

安里氏の論証は、「吽形大龍柱のトグロ巻きの展開図」を根拠に「戦前大龍柱（吽形）のトグロ巻部背面にホゾ穴や無彫刻部分が存在しないという事実」を明らかにしようとする、実に回りくどい奇妙なやり方であった。さらに、その「展開図」の「背面」とするところは二つの写真が合成されていた。

これまで、戦前大龍柱の基部背面を写した古写真はないと考えられてきた。欄干に連結するホゾ穴が存在しないことを論証したいのならば、欄干からの接合部分の可能性のあるトグロ巻部の背面、これが撮影された写真が新たに発見されたか、これまでに確認されていた写真の中にトグロ巻部の背面が写っていたのに誤認されてきたか、そのどちらかを示めせば良いだけである。二つの写真を合成した「展開図」を作成しこれを根拠とするのは異常である。

不審に思った私は、この「背面」が無理やり作られたものであって、実際は「正面」だった筈であると考え、この二つの写真を合成した展開図の作成を「データ改竄」、そしてこのデータを用いた論証を「捏造報告」ではないかと指摘したのである。

安里氏の反論

2ヶ月半もの間、何の反論も無かったので、これまでの「絵図の読み」についての指摘のように「だんまり」を決め込むのかと思っていたら、6月1日、2日付で安里氏からの反論「ホゾ穴と正面向き復元　検証・首里城大龍柱」が琉球新報に掲載された。その上・下の記事は全て、「データ改竄」「捏造報告」の指摘に対する抗議とトグロ巻部の背面に関する私の誤認についての指摘に費やされ、私の論考の上・下にわたる「絵図」等、他の指摘には一切触れなかった。

この反論の中で東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵の写真（以下「新資料写真」と略）が公開された。この写真で昭和の沖縄神社拝殿への改修の時、吽形大龍柱のトグロ巻部の背面が御庭側に向けられていたことが初めて明らかになった。

私は、この改修の時、大龍柱が正面向きから相対向きに変えられたのは、頭部胴体のみで、トグロ巻部は動かされていないと思っていた。この写真によりその認識が誤っており、トグロ巻部は180度回されていることを知った。なぜこのようなことをする必要があったのか全く分からない不可思議な行為であるが、これが写真の示す事実である。

トグロ巻部が阿形、吽形共に180度回されていたのは、構造上のものとは考えられない。台石ごと回転しなければ、基底部を弄っただけ構造は弱くなってしまうが、台石を回転している形跡はないことを西村貞雄氏が話されている。頭部胴体の向きに合わせる訳でもなく180度回すというのは造形的にも合理的な理由がない。阿形については熊本鎮台沖縄分遣隊が無理矢理折ってしまっているので基底部と台石との接続部分に損傷が生じ、たまたま180度回したら安定したということもあったかもしれないが、吽形のトグロ巻部までもが同じように180度回転しているとなると、やはり構造上の理由ではない。私には何か別の理由、例えば龍の霊力のようなものを無化するために、わざわざ痛めつけたというような理由しか考えられない。もしもそうであるなら、実に酷いことをしたものである。

とにかく、〈安里氏の「展開図」の「背面」が無理やり作られたものであって、実際は「正面」であり、二つの写真を合成した背面を含む展開図の作成が「データ改竄」〉との指摘は成立しなくなった。

■「研究上の不正」を告発、そして取り下げ

2ヶ月半もの間、安里氏や技術検討委員会からの反論や説明がなかったので、私は、組織対応がなされるのが当然であると考え、沖縄総合事務局及び沖縄県立芸術大学に「研究上の不正行為」の疑いがあると告発していた。沖縄総合事務局は委員を委嘱した機関として、沖縄県立芸術大学は安里氏に名誉教授の称号を与えている機関として、調査委員会を設置し調査する責任があると告発したのである。

これに対して、沖縄総合事務局の返答は次のようなものだった。

「沖縄総合事務局としては、技術検討委員会事務局の立場として、貴殿から頂いたメールの内容について、首里城の彩色・彫刻等の詳細な検討を行っている技術検討委員会作業チームのメンバー（高良委員長、田名委員、安里委員、伊従委員、波照間委員、室瀬委員）に共有させていただきました。

貴殿からいただいたご意見については、技術検討委員会作業チームで確認いただいたうえで、必要があれば技術検討委員会での検討課題として取り上げていくことになると考えています。」

告発されている当事者にその取り扱いを委ねるという前代未聞の対応に驚き、改めて沖縄総合事務局長宛の文書で「告発」を行った。その後、沖縄総合事務局長からは何の連絡もなかった。

沖縄県立芸術大学学長と事務局長宛に送った文書に対しても返答がなかったので、事務局長に、せめて文書を受け取った返信は出すべきとメールしたら、本当に受領の文書だけが来た。

「琉球美、造形研究会」設立準備会から昨年以来要望していた沖縄県知事との話し合いに向けて、沖縄県土木建築部首里城復興課との面談も行っていたので、「研究上の不正行為」の告発について、沖縄県立芸術大学が対応するよう県としての監督責任を求めてもいた。

〈安里氏の「展開図」の「背面」は「正面」であり、二つの写真を合成した背面を含む展開図の作成が「データ改竄」〉との指摘は成立しなくなったため、安里氏の反論掲載の翌日6月3日付で、私はこの告発を取り消す文書をそれぞれに

発送した。

読者諸氏に対しても「応答記事」でお詫びしたい旨、琉球新報の担当班長にも連絡した。

「新資料写真」が示す事実に、研究者として謙虚にその誤りを認めさせていただくものである。

■新資料写真から考察が深まる

しかし、安里氏の論考の手順、方法が通常では考えられないものであったのは事実である。「報告資料」において安里氏はトグロ巻部の展開図を作成する際に、背面に当たる部分を二つの写真を合成して作っていた。6月2日付の反論のように「新資料写真」のみで作成していれば、このような疑義は生じなかった。何故、わざわざ上部に田辺泰の写真を合成したのだろう。それ以前の問題として、展開図など示す必要はなく、例え解像度の低いものしか入手していなかったとしても「新資料写真」をそのまま提示し、これにトグロ巻部背面が写っていることを説明すれば良かったのである。

今回、その「新資料写真」がかなりの解像度で公開されたのは大変に喜ばしい。これにより、欠損部の補修前の状態が明らかになり、ごく僅かな部分ではあるが、大龍柱の背面の状態の確認を進めることが可能になった。

安里氏は6月2日付の反論で、戦前大龍柱より古い遺物には無彫刻の平坦部分があるが「新資料写真」により戦前大龍柱の背面にはウロコ彫刻があること、そして、カスガイ溝の深さとホゾ穴の深さの関係から「欠損部にホゾ穴はなかったと私は考えている」としているが、これはかなり客観性を欠く考察である。戦前大龍柱が欄干に接続していたとして、古い遺物の時と同様の接続方法であったかどうかは不明であり、ホゾ穴の周りの無彫刻部分にカスガイが嵌められていた可能性もあるからである。

熊本鎮台沖縄分遣隊によって折られた戦前大龍柱の阿形、それに合わせて切断された吽形の頭部胴体と台石上のトグロ巻部が繋ぎ合わされた時、カスガイはそれぞれ三箇所嵌められたことが、鎌倉芳太郎と坂本万七の写真、そして「新資料写真」から確認できる。阿形は左右と前面、吽形は左右と背面の三箇所である。

「新資料写真」の吽形は今回かなり解像度の良い写真が公開されたが、阿形については6月1日付反論の図1で背景を切り取られた小さな写真しか公開されていない。この阿形についても、解像度が良く、切り抜きなどされていない写真の公開を望むものである。阿形のトグロ巻部背面にはカスガイ跡は無いはずなので、ホゾ穴の存在の有無を確認できる可能性が高いと考えられる。

技術検討委員会に望みたいのは、「新資料写真」のような新しく入手した重要な資料は、できる限りオリジナルな状態ですぐに公開していただきたい。さまざまな分野の多くの人の目に触れ検討が行われることで、事実への認識が進むことが期待できるからである。

■学術的議論放棄はどちらか

安里氏は6月2日付反論の最後で、「学術的議論に、感情的な言葉や相手を貶める言葉を持ち込むと冷静な判断や評価ができなくなる。新聞はそうした言葉による議論を助長しないでほしい」としているが、私の論考はけっして感情的で相手を貶めるためのものではないし、安里氏の論考の手順、方法が異常であったことに起因するのを自覚すべきである。そしてこれは、新聞紙上での自由な議論を萎縮させるものである。私がトグロ巻部についての認識を誤った上で告発したのは率直にお詫びするが、このことで「新資料写真」が公開され、吽形のトグロ巻部背面が御庭に向いていたことが明らかになったこと、その時点の背面の状態が公開されたのは、事実への認識の進展に寄与している。

何よりも、「学術的議論」を望むのであれば、私が2020年10月から指摘し続けている「絵図だけでは大龍柱の向きは特定できない」ことに対して学術的な反論を行うべきである。これを無視して「寸法記」絵図や「尚家文書」絵図を「正しい」ものと言うことはできない。

1枚の写真の示す歴史的事実に対して謙虚になることが必要なのは、まさにルヴェルトガ撮影の首里城正殿写真に対してである。ルヴェルトガ写真により王国時代の大龍柱の姿は明らかになった。横向きの大龍柱が描かれた尚家文書を「正しい」ものと言うなら、これが描かれた1846年からルヴェルトガ撮影の1877年までの間に大龍柱の向きを変えたことを示す古文書の発見が必須である。これが発見できないにも関わらず、「暫定的な結論」として相対向きを押し通すことは明らかな論理破綻である。

推測による復元は断じて行ってはならない。現段階では、ルヴェルトガ写真の示す姿が唯一確実な歴史的事実であり、これが「暫定的な結論」となるべきなのは明らかである。

そしてもしも、1846年から1877年までに大龍柱の向きを変えたことを示す古文書が発見されれば、相対向きに直せばよいし、「新資料写真」を詳細に検討するなどしてホゾ穴の存在を証明できれば台石を撤去するという、冷静で科学的な対応がとられるべきなのである。技術検討委員会こそが「学術的議論」を放棄している。

■マスメディアの凋落

以上が、琉球新報に「応答原稿」として寄稿した内容である。もちろん N27の方が文字数の制限がないので、より説明を細やかにしているが、基本は同じである。この原稿の掲載を琉球新報は当初から拒否しようとしている。

編集担当者とのこれまでのやり取りの最後のメールは次のようなものである。

「大龍柱のトグロ巻部をめぐる永津先生の見解に誤りがあったという点です。この誤った見解のまま、永津先生がご自身の寄稿で、安里先生の報告を「ねつ造」「不正行為」と書いたことを私どもは、重く捉えています。この件、編集局三役と共通認識です。よっぽどの根拠がないと「ねつ造」という表現は避けるべきでしたし、このような表現のある原稿を掲載してしまった、私どもに掲載責任はあります。」

私の「応答原稿」を掲載しないことが「私どもの掲載責任」を果たすことになるのだろうか。全く逆であろう。責任を果たすためにも、この「応答原稿」は掲載するべきなのである。

これは、安里氏の「新聞はそうした言葉による議論を助長しないでほしい」に萎縮する惨めなマスメディアの実態でしかない。

私は、〈安里氏の「展開図」の「背面」が「正面」であり、二つの写真を合成した背面を含む展開図の作成が「データ改竄」〉との指摘は成立しなくなったため告発を取り下げたが、別の疑念を深めている。

この二つの写真を合成したのは「新資料写真」のトグロ巻部上部を隠すためだったのであろう。

報告資料で安里氏は、わざわざ、画像解像度の落ちた「新資料写真」から大龍柱のみを切り抜き、上部に「欠損部分を石灰様のもので盛り上げて補修し」元の形が分からなくなった田辺泰の写真を嵌め込み、「戦前大龍柱にホゾ穴は存在しないという事実」と結論付けた。

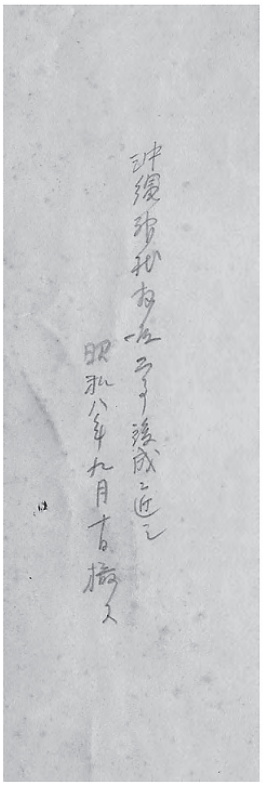
これはやはり「データ改竄」による「捏造報告」なのである。

私は、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻デジタルミュージアム準備室に依頼し、この「新資料写真」のデータを入手した。安里氏もこれと同じデータを持っているはずだ。ここに手を加えていない画像を公開するので、どちらの主張が妥当であるか、読者諸氏に判断していただきたい。

付記

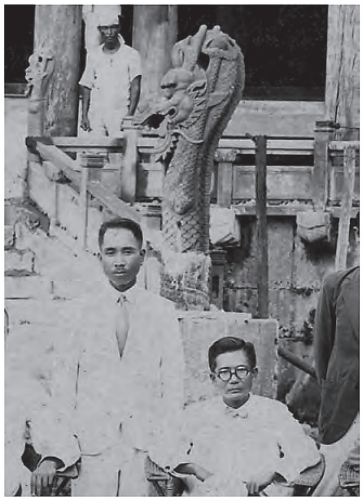
この原稿を校正中2022年9月28日琉球新報に安里進「論争ゆがめる誹謗中傷」が掲載された。この中で安里氏は〈永津氏は…「捏造」は間違いだったと認めた〉と書いているが、これは事実と異なる。琉球新報の担当者にもはっきりとこれを伝えたにもかかわらず、このような間違った記事を掲載したことに厳重抗議した。私の方こそ寄稿掲載を拒まれ一方的に名誉を傷つけられている。

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵「首里城正殿写真」（新資料写真）



写真裏面

大龍柱吽形
拡大



大龍柱阿形
拡大